

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

内山 尚子

【所属】(助成決定時)

広島大学大学院 人間社会科学研究科

【研究題目】

「アメリカ在住初期の猪熊弦一郎のモダニズム：芸術の社会性と抽象的造形をめぐって」

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、画家でデザイナーの猪熊弦一郎(1902-1993)がアメリカ合衆国(以下、アメリカ)を主な活動の場とした1950年代半ばからのおよそ20年間のうち特に初期に注目し、その間の作品と活動を美術史の観点から検討することである。猪熊は新制作派協会(現新制作協会)の創設者のひとりとして日本の前衛美術の発展を支えただけでなく、壁画や本の装丁、家具、包装紙のデザインなど、「純粹芸術」の範疇を越えて活動した人物である。しかし、その画風にヨーロッパのモダニストたちからの学びが指摘される一方で、1955年以降長年にわたり活動の拠点としたアメリカの美術界との関係性についてはまだ比較的研究の余地が残された状況にある。本研究は、猪熊のトランスナショナルな活動文脈の広がり視野に入れつつ、アメリカ美術研究の立場から在米期の猪熊の作品と活動について基礎研究を進めることを目指すものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、①先行研究の読解、②作品の実見調査および習作や周辺作例との比較、③一次資料の調査、読解と分析を通し、猪熊の作品や活動をその時々の社会的・文化的文脈に則して解釈することを試みた。その過程において、猪熊に関する作品や資料を管理する丸亀市猪熊弦一郎現代美術館から全面的な協力を得、アメリカ在住期の猪熊に関する未刊行の資料(スケッチブック、手記、写真、蔵書等)を調査する貴重な機会を得た。加えて、国立国会図書館、東京国立近代美術館アートライブラリ、国立新美術館アートライブラリー、東京都現代美術館美術図書室、東京都写真美術館図書室、アーカイヴズ・オブ・アメリカン・アート(日本国外のためオンラインでの資料の取り寄せ)等にて、文献や関連資料の網羅的な収集と調査を行った。

アメリカ美術については白人男性芸術家を軸とした長年の研究が見直され、近年、非白人や女性芸術家の活動の再評価が積極的に進められている。なかでも特筆すべきは、非白人間のエスニシティの枠組みを超えた交流に関する研究が進む現状で、それは白人/非白人の二項対立の枠組みをより複雑化してゆくための手がかりともなり得る。猪熊の周辺でも、同じニューヨークのギャラリーで共に活動した黒人画家ノーマン・ルイス(1909-1979)の東アジア文化への関心を紐解いた先行研究があることを踏まえれば、猪熊のアメリカ在住期についての研究は、こうした近年のアメリカ美術の研究動向へのアプローチともなり得るものである。

資料調査を進めるなかで見えてきたのは、多様な文化的背景を持つ芸術家の集うウィラード・ギャラリーや日系人コミュニティとの関わりのなかで、この時期猪熊がニューヨークにおける自身の「居場所」を少しずつ作り上げていった様子である。在米初期の絵画主題に「日本的」要素が指摘される猪熊だが、展覧会の広報にも同様の傾向は確認できた。また、「アメリカ美術」や「モダン・アート」を冠した複数の展覧会への参加に加え、JETRO(現日本貿易振興機構)関連の仕事も多数確認できたことは、冷戦下で対日感情の改善が図られた当時のアメリカ社会において、猪熊が「日本文化」の代弁者であることをある程度求められた裏付けと言えるだろう。さらに、抽象的造形を模索する猪熊のこの時期の絵画制作のプロセスを、周辺の芸術家との交流や習作等から辿ることができたほか、具象的なスケッチや猪熊が手がけた雑誌の表紙絵、そして画家自身の言葉からは、猪熊が当時のアメリカ社会に、日本社会とは異なる「新しさ」や「人種の多様さ」を見出していた様が確認できた。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究を通して、ヨーロッパのモダニズム美術に戦前から関心を寄せてきたこと同様、猪熊が戦後も、新たな「美術の中心地」となったアメリカ、ニューヨークにおける同時代的な美術の動向を積極的に吸収し、そのなかで自身の作品制作や展示活動に取り組み続けていたことが具体的に見えてきた。さらに、社会面に注目すれば、猪熊の在米期は公民権運動やヴェトナム戦争への反戦運動の時代とも重なり、猪熊の作品や記録、言葉からは、そうした社会の変化にある程度は目を向けていたであろう様子が窺えた。それは恐らく、彼のニューヨークでの幅広い交友関係によるものだろう。だが今回の調査では、猪熊がそうしたアメリカ社会のなかで自分自身をどのように位置付けていたのかについては十分確認することができなかった。渡米前に日本の美術界で既に前衛画家としての地位を確立していた猪熊のキャリアを踏まえれば、トランスナショナルに活動する芸術家のアイデンティティをひとつの地理的枠組みのなかに集約させようとする自体に限界があるのだろう。こうした点を踏まえ、今後、この時代のアメリカにおけるエスニック・マイノリティの芸術家のアイデンティティの複雑なあり方については、さらなる検討を進めてゆきたいと考えている。